

プログラム・ノート

堀 朋平

今日のカテゴリーにすんなり取まらない、個性的な楽器たちがバロック時代を賑わせていた。チェロ・ピッコロもそのひとつ。「小さなチェロ」を意味するその名のとおり、ヴィオラくらいの大きさで、実態はさまざま。通常の「4弦」の上にもうひとつ弦を張ることも多かったという。

だから、得も言われぬほど高音が美しい。ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)は両手にあまる教会カンタータで「チェロ・ピッコロ」を指定(ないし想定)し、よく親しんでいた。そんな魅惑の楽器を中心に編まれた4作品の物語をお楽しみいただく。

J. S. バッハ：ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ第1番 口短調 BWV 1014 (チェロ・ピッコロとポジティブオルガンによる)

中部ドイツの都市ケーテンは、領主が教会音楽を重んじないカルヴァン派だったこともあり、バッハが勤めた6年間(1717～23年)には器楽曲がたくさん生まれた。6曲のヴァイオリン・ソナタ集もそのひとつ。同時代の筆写譜に「協奏的チェンバロのための」とあるとおり、右手と左手が主張しあって溶け合うスタイルが大きな特徴である。

第1番は、受難の歩みを思わせる「口短調」。冒頭で右手が聴かせるのは「ため息の音型」だ。これをチェンバロではなくオルガンが奏で、テノール声域のチェロ・ピッコロと対話を重ねてゆくと——たいへんに珍しい組み合わせだ——まるで受難曲のような雰囲気をもたらすのではないかと。緩-急-緩-急の4楽章からなる。

J. S. バッハ：無伴奏チェロ組曲第6番 二長調 BWV 1012

上述の都市ケーテンでバッハは、楽器のさまざまな可能性を追求した。低音を支えるチェロを独奏楽器として解き放つ6作セットは、その頂点にたつ偉業。同じころに成立した無伴奏ヴァイオリンの作品には先例があるのに対し、チェロで同じことをしたのはバッハが初めてだ。

ラストを飾る第6番は、2つの点できわだっている。まずバッハの「二長調」は——先ほどの口短調と正反対に——しばしば栄光や歓喜をあらわす。そしてこの第6番にだけ、まさに5弦のチェロが指定されている。通常の第4弦に、その5度上にあたる「e弦」を加えた高音域によって、連作を閉じる高らかなしらが開拓されたのだ。プレリュードに続く5つの楽章は、どれも当時の組曲を構成するスタンダードな舞曲である。

シューベルト：4つの即興曲 D. 899 より 第3番 変ト長調

19世紀はじめのウィーンでは、気ままに楽想をひろげていくピアノ曲が人気をさらった。そんなジャンルを代表する「即興曲」の先例にならって、晩期のフランツ・シューベルト(1797~1828)は4曲からなる曲集を2つ作った。第一作(D. 899)は、さすらいやダンスや白鳥の飛翔がつまった心の旅を描く。第3番は宗教的な祈りだ。フラットが6つも付く黒鍵だらけの調は異例中の異例。この籠った調^{くごも}は、まさにシューベルトの青春時代にウィーンで作られた楽器で聴いてこそ、沁み^{しみ}てくるだろう。靄^{もや}のなかで天地を往還するような深い抒情、最低音へとおちてゆく息詰まるラストを味わいたい。

シューベルト：アルペッジョーネ・ソナタ イ短調 D. 821

19世紀には、たくさんの楽器が作られては消えていった。既存のものに似ていながら、どれも違う魅惑の音……。

小さなチェロの形をしたその楽器は、チェロ・ピッコロと似てエンドピンなしで膝に挟んで演奏されるが、調弦はギターと同じ(E-A-d-g-h-e' ミ-ラ-レ-ソ-シ-ミ)でフレットも付いている。当時の文献で「チェロとギターのあいの子」とか「愛のギター」などと呼ばれた。「美しく豊満で愛らしいその音は、高音域ではオーボエのようで、低音域ではバセットホルン [=クラリネットの前身] みたいだ」(1823年)とも称えられたが、10年後には忘れられてしまう。

1821年頃にこれを発明したのが、ウィーンのヨハン・ゲオルク・シュタウファー(1778~1853)。シューベルトはギターを愛した作曲家だったから、この新発明にも魅せられただろう。『アルペッジョーネ・ソナタ』は1824年11月、この楽器の奏者ヴィンチェンツ・シュースターの依頼で書かれ、プライベートな場で初演されたと考えられている。ただし「アルペッジョーネ」という名称はシューベルトの自筆草稿に記されているだけで、同時代の文献には見当たらない。広くなめらかなアルペッジョに魅せられて、シューベルトが名づけたのかもしれない。

第1楽章では、宗教的なカデンツ(いわゆるアーメン終止。ラスト10秒など)が朴訥なメロディを彩る。第2楽章は、最後のミサ曲(D. 950)の「キリエ」を予告する音づかいで幕を開けるが、やがて最低音への深い沈潜をみせる。得意の高音とはちがう素顔をチェロ・ピッコロは覗かせるだろう。第3楽章では民謡風のメロディが溢れだす。ひそやかな一室に広がる祈りのような——シューベルトの人柄がそのまま表れたような——作品である。